

この前、知り合いの校長先生からお電話をいただいた。講演の依頼だった。なぜだろうか。昨年度までは、授業を参観してアドバイスをするという指導助言が多かった。講話や講演は年に数回程度だった。ところが、今年度になった途端に、指導助言の機会がなくなり、一気に講演が増えた。短くて60分、長いと180分である。今回の依頼は70分だった。

いつもの如く、まずは即答で引き受けることにした。一月前を迎えた。そろそろ資料作成に取りかかるかと考え、校長先生に電話をした。参加者の数、年齢構成、そしてオーダー内容を確認めた。今回は、ベテランの先生方からのリクエストらしい。とにかく高澤先生の話が聞きたいのだということだった。テーマがあるわけではない。これこそ講演冥利に尽きるとでもいうのだろうか。

聞くと、半分は若い先生方だという。経験豊富なベテランの先生方にも若い先生方にも満足いただけるような内容にしなければならない。早速、構想を練った。いつものことだが、作業を始めると、意外と短い時間で話の流れができあがる。次々と文章が出てくる。

格好をつけないことである。ありのままの自分を出すようにする。いわば、生き様を知ってもらうことにした。人生には、節目というものがある。必ずエピソードがある。転機ともいえるような出会いや出来事がある。それらについて話すことにした。そうすれば、ベテランの先生方からは共感を得られるかもしれないし、若い先生方にとっては何かしらの参考になるかもしれない。

結果的に、国語人としての我が人生を振り返ることとなった。今までも、「校長室だより～燦燦～」や「園長通信～こころ～」などで、自分の人生について振り返ることはあった。だが、それは、人生の一場面に限ったことだった。今回は、場面と場面とをつなぎ合わせ、一本の線として振り返ることができた。

若い先生方は、日々、国語の授業で悩み苦しんでいるはずである。昔の自分がそうだった。ちょうど、「誰にでもできる国語研究授業A to Z」を作成中だった。これを使うことにした。国語の授業をどのように進めればよいのか。どのように教材研究をすればよいのか。研究授業に対しては、どのように向き合えばよいのか。そういった疑問、困りごとに答える内容になっている。

わずか70分ですべてを話すことはできない。そこで、配付資料はテキストの形式にした。後で読むことができるものになっている。資料というよりは、もはや読み物である。自分の生き様から何を伝えることができるか。国語人としての我が人生は、失敗、後悔、感謝から成り立っている。そのことを改めて認識することができた。自分のことを70分も話すことができるのは幸せなことである。ぜひとも、ご期待に応えなければならない。